

細川幽齋の明石岡詠——『衆妙集』六四五番歌をめぐる——

中村健史

1

細川幽齋の家集『衆妙集』には次のような和歌が収められている。

明石の岡訪ねてみ侍りしに、松の木立ち古りたるを  
昔の跡と里人の教へ侍れば

夕日影明石の岡の跡訪へば昔覚ゆる松風ぞ吹く

〔衆妙集〕六四五

おおむね「夕日の光があかあかと差しこむ明石の岡に古跡を訪ねると、昔を思わせる松風が吹く」というほどの内容か。ただし「跡」や「昔」といった言葉が具体的に何を指すかは、かならずしも明らかではない。「昔の跡と里人の教へ侍れば」なる詞書からは「ここがかの有名な」と言わんばかりの口吻さえうかがえるが、現代の読者が『衆妙集』のみによってすべてを理解することはむずかしいだろう。

作者の意図ははたしてどこにあったのか。本稿ではさきさやかながら一首の注解を試みたい。

2

幽齋が典拠としたのは、おそらく『源氏物語』明石巻ではないかと思う。冒頭近いあたりに、

浜のさま、げにいと心ことなり。人しげう見ゆるのみなむ、  
御願ひにそむきける。入道の領ちうじ占めたる所々、海のつら  
にも山隠れにも、時々につけて興をさかすべき渚の苦屋、  
行ひをして後の世のことを思ひすましつべき山水のつら  
に、いかめしき堂を建てて三昧を行ひ、この世のまうけに、  
秋の田の実を刈りをさめ、残りの齡積むべき稲の倉町ども  
など、をりをり所につけたる見どころありてし集めたり。  
高潮に懼おそぢて、このごろ、娘などは岡辺の宿に移して住ま  
はせければ、この浜の館に心やすくおはします。

「明石はたいへん風光明媚で、ただ人が多いことだけが源氏のご希望に沿わないのであった。入道の所領には、海岸にも、山のほうにも、季節ごと、所がらにふさわしい見どころが集めてある。折々に興趣をかきたてるような渚の苦屋もあれば、山川

のかたわらには立派な三昧堂もあり、また稲を刈りおさめるための倉町など、数えあげればきりが無い。高潮を恐れ、娘などは岡の家に移してあったので、源氏は浜の館で気楽にお過ごしになる」という文章がある。この「岡辺の宿」の跡こそが、『衆妙集』にいわれる「明石の岡」ではあるまいか<sup>(1)</sup>。

源氏は浜の館から岡辺の宿へと通い、「娘」、つまり明石の君と契りを交わす。山隠れにある女の住まいは、物語のなかで次のように描写されるのだった。

造れるさま、木深く、いたきところまさりて、見どころある住ひなり。海のつらはいかめしうおもしろく、これは心細く住みたるさま、ここにゐて、思ひ残すことはあらじとすらむと、おぼしやるに、ものあはれなり。三昧堂近くて、鐘の声、松風に響きあひて、もの悲しう、岩に生ひたる松の根ざしも、心ばへあるさまなり。前栽どもに虫の声を尽くしたり。ここかしこのありさまなど御覧ず。娘住ませたるかたは、心ことに磨きて、月入れたる真木の戸口、けしきばかりおしあけたり。

「この宿は木深く、趣向に富んだ造作で、「浜の館」が立派で風流なのに対し、ひっそりと住まう様子であった。かようなところに日を送れば、あらんかぎりの物思いを尽くすであろう、と想像なさるにつけ、どことなくあわれな感じがする。三昧堂に近いせいで、松風が鐘の声と響きあつても悲しく、巖上の松の根さえも趣深い。前栽に放つたさまざまの虫が鳴くなか、源氏はあちらこちらと一瞥になるのであった。娘のいるあたり

はいっそう念入りに磨きたて、月の差しこむ真木の妻戸がかたちだけ開けてある」。

引用中「松風」「岩に生ひたる松」などの表現が幽斎歌と重なる。ちなみに明石巻では、入道が源氏の琴に聞きいる場面に

広陵といふ手を、ある限り弾きすましたまへるに、かの岡辺の家も、松の響き波の音に合ひて、心ばせある若人は身にしみて思ふべかめり。

「お弾きになる『広陵』の曲が、岡辺の家では松風や波音にまじつて聞こえていよう。たしなみのある若い女房などは、身にしみて思うに違いない」とあつて、山住みの心細さを象徴するものとして繰りかえし「松の響き」が描かれるのだった。一首はやはり『源氏物語』に基づくと考えるのが自然ではないか。もとより明石の君との出会いが源氏の運命を大きく変えたことは人もよく知るところ、その舞台となった「明石の岡」はことさら忘れたい土地として読者に記憶されていただろう。和歌に詠まれるべき素地はじゅうぶんにあつたのである。

### 3

しかし、たとえば『歌枕名寄』に

明石 浦 浜 湯 瀧 渡 泊

とあるように（卷三十一）、明石といえは「浦」「浜」「潟」など水辺の景をうたうのが普通である。『衆妙集』が取りあげる以前、「岡」を詠んだ和歌ほどの程度あったのか。以下ではその表現史をたどってみよう。

管見のかぎり、もっとも古い例としては『最勝四天王院障子和歌』の定家詠が挙げられる。

明石潟いさをちこちも白露の岡辺の里の波の月影

〔拾遺愚草〕一九三三

題は「明石浦」。久保田淳氏『訳注藤原定家全歌集』（河出書房新社、一九八五〜八六年）、渡辺裕美子氏『最勝四天王院障子和歌全釈』（風間書房、二〇〇七年）などが指摘するように、第二句は源氏が明石の君に贈った「をちこちも知らぬ雲居にながめわびかすめし宿の梢をぞとふ」を踏まえる（明石巻）。「岡辺の里から見やると、明石潟は遠いのか近いのかも分からない。月光が波とひとつになって輝いているから」。

よく知られるとおり、つとに俊成に「源氏見ざる歌よみは遣恨の事なり」〔六百番歌合判〕の言があり、定家自身もまた物語に対する強い興味を抱いていた。すでにして「源氏」を典故とすべき条件は整っている。さらに多人数の競争の場では、なるだけ同類を避けようとする意識がはたらきがちだった<sup>③</sup>。人の詠みそうにない本説をあえて探しもとめた結果、作者は「岡辺の里」を見出したのだろう。

おそらくこの定家詠が先蹤となったに違いない。ややくだつて『続古今集』雑中には「中務卿親王家百首歌に」として

明石潟波の音にや通ふらむ浦より遠方の岡の松風

〔続古今集〕雑中・一六五二、鷹司院帥

「遠く岡辺のあたりでは、波の音に松風が響きあっているのだろう」という作品が収められており、木村尚志氏ほか『和歌文学大系 続古今和歌集』（明治書院、二〇一九年）に「かの岡辺の家も、松の響き波の音に合ひて、心ばせある若人は身にしみて思ふべかめり」（明石巻）を意識すると注釈する。なお、第四句は源氏が紫の上に贈った「遙かにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦伝ひして」（同前）が典故（木船重昭氏『続古今和歌集全注釈』（大学堂書店、一九九四年）及び『和歌文学大系』参照）。

さらには「宗良親王千首」にも、岡辺の宿に通いなれたころの様子が次のように描かれるのであった。

明石潟浦路は月に訪ひ慣れつ住まひゆかしき岡の家かな

〔宗良親王千首〕四〇九「岡月」

上句の「月に訪ひ慣れつ」は、八月十三夜に源氏が明石の君をはじめて訪うたことを指す。「岡月」という題から『源氏物語』を連想するほど、両者の結びつきは強かつたらしい。

室町時代に入ると、正徹『草根集』に

明石潟岡辺も浜も見し人の絶えたる峰に月ぞ残れる

〔正徹『草根集』四〇五三「嶺上月」〕

明石潟浦風曇る高潮も及ばぬ岡に澄める月影

(同四一六七「岡上月」)

「岡辺にも浜にも知っている人はいなくなり、孤峰に月だけがかかっている」「月影の澄む岡辺の宿は、『源氏物語』に「高潮に懼ぢて」云々と記すとおり、浦風がくもるほどの高潮でも平気だ」とあるほか、下冷泉政為が「播州細川庄へ下向」した際の贈答歌に

明石潟岡辺の月の秋までも身をば頼まで行く空は憂し

(下冷泉政為『碧玉集』一三六一)

と見え、三条西実隆も「岡上月」の題で

眺むらん梢もさぞな明石潟訪はばや月に岡の辺の宿

(三条西実隆『雪玉集』一二三)

「月影に岡辺の宿を訪ねたいものだ。眺める梢もさぞ明るいことだろう」とうたっていた(第二句は前引明石巻「をちこちも」歌に拠る)。

ただし、直接「明石の岡」という言葉を詠みこんだ作品としては、以下に掲げる正徹歌をもって嚆矢とする。

雪積もる都の冬をしめしだに同じ明石の岡の松陰

(正徹『草根集』六〇三〇「岡雪」)

一首は「雪の積もる大堰川で冬を過ぎしたのすら、岡辺の宿の

松陰と変わりはないかった」の意か。雪の降る日、大堰川の別邸で明石の君が姫君を源氏に託す場面が下敷きになっている(薄雲巻)。物語中に「この雪すこし解けてわたりたまへり。例は待ちきこゆるに、さならむとおぼゆることにより、胸うちつぶれて、人やりならずおぼゆ」、恋しい人が来るのはうれしいが、親子の別れは胸がつぶれる、という文章があるから、作者は「明石にいるときと変わらず、さびしい山里にいて物思いは種々つきることがない」と感慨を述べたのだろう。

弟子の正広にも「更けにけり月に待つ夜の真木の戸もかくや明石の岡の辺の宿」(正広『松下集』八五五)、「あたり夜とひとりや風の慕ふらん月も明石の岡の辺の宿」(同二四八二)などの詠があることからすれば、歌語としての「明石の岡」は正徹周辺にはじまるものらしい。しかし、この表現が使われた範囲は思いのほか狭く、右のほかにはかろうじて

あかれめや叩く水鶏に聞き添へて幾夜明石の岡の松風

(松永貞徳『逍遙集』三〇七一)

がある程度だった(『歌枕名寄』にも立項されない)<sup>110</sup>。

注目すべきは、むしろ連歌における用例ではないか。すなわち、古くは「永享四年九月十三日賦何人連歌」に

山よりも野に猶須磨の月晴て 聖

夜こそあかしの岡の薄霧 覺阿

(永享四年九月十三日賦何人連歌「六七く六八」)

「須磨に月が晴れるときには、一夜を過ごす明石の岡も霧が薄らぐ」と見え(『宗祇時代連歌』所収)、以後少なからぬ作品が残されている。ちなみに覚阿の句が「岡の薄霧」とするのは、伝人麻呂歌「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れゆく舟をしぞ思ふ」(『古今集』羈旅・四〇九)が典拠。伊予大三島宮蔵「長祿三年千句」に

月にこそなぐさみもあれ須磨の秋

あかしの岡のたつやうき霧

代秀

(「長祿三年千句」第十・七五く七六)

とあるのもほぼ同工の発想であろう。ともに叙景的な色彩が濃く、『源氏物語』の世界はやや後景に退いているが、他方、たとえば宗砌の「おもひぞたえぬ独ねの月／長夜を明石の岡の草枕」(大阪天満宮本『宗砌句集』九三四)は明らかに光源氏を俤とする。また「河越千句」でも明石の君が琴の上手であることを踏まえて

分すて、誰いなみ野々草枕

とまれあかしのをかごへの宿

心のみ引琴の音は聞あか

(「河越千句」第九・三九く四一)

「をかごへの宿」に一夜を過ごして、琴の音色に聞きあきることはない」とうたうのだった。なお、宗祇には「遠しまかげはただ浪のこゑ／霞む夜のあかしの岡辺鐘なりて」(吉川本『老

葉』一四七〇)などの作もあり、やはり明石巻の本文(「三昧堂近くて、鐘の声、松風に響きあひて」)に拠る。

このように連歌の世界では「明石の岡」がしかるべき名所として認められていた。俳諧書ではあるが、野々口立圃『はなひ草』非水辺分の条には

一 難波<sup>キ</sup>、志賀、住吉、佐野のわたり、須磨の上野、明石の岡(下略)

と列挙されるほどで、近世初期には一定のひろがりを持つ語であつたらしい<sup>(四)</sup>。幽齋の歌が定家や正徹を意識しているのはたしかだが、表現そのものについては付合文芸の影響をつよく受けていたのではないか。

#### 4

「明石の岡」は『源氏物語』明石巻を典拠とし、室町時代なかがころから和歌、連歌で使われるようになった表現である。中世人にとつては相応になじみのある言いまわしで、だからこそ『衆妙集』のなかにも詠みこまれたのだろう。したがって、詞書にいわゆる「昔の跡」はおそらく岡辺の宿を指すものと見てよい。

だが、幽齋の歌を読むうえで、ほかの典拠を考えてみる必要はないのだろうか。

夕日影明石の岡の跡訪へば昔覚ゆる松風ぞ吹く

特に気にかかるのは第四句「昔覚ゆる」である。「松の木立ち古りたるを昔の跡と里人の教へ待れば」という記述を踏まえれば、これが作者の感懐であることは疑いない。しかし、一方で『源氏物語』には次のような場面も描かれるのだった。

松風巻、姫君を出産した明石の君は、母尼君とともに京にのぼり、大堰川のあたりにかくれ住む。心細げな山荘のたたずまいはいかにも日陰の身を象徴するかのようで、どことなく岡辺の宿を思わせる。

なかなかもの思ひ続けられて、捨てし家居も恋しう、つれづれなれば、かの御かたみの琴を掻き鳴らす。をりのいみじう忍びがたければ、人離れたるかたにうちとけてすこし弾くに、松風はしたなく響きあひたり。尼君、もの悲しげに寄り臥したまへるに、起きあがりて

吹く

源氏の訪れは絶えてない。物思いの種はつきもせず、捨てたはずの故郷が恋しく思われて、明石の君はつれづれのあまり形見の琴をかき鳴らすのだった。悲しみをこらえきれないまま、人気がないところで弾いていると、松籟が遠慮もなく響きあう。起きあがった尼君が「まったく別の世界のようなこの山里にひとり帰ってくる、昔聞いたのとよく似た松風が吹いている」と歌を詠む。巻名の由来ともなった一首である。

「聞きしに似たる松風」が「かつてこの館で聞いた」の意であることは言うまでもない。しかし同時に「捨てし家居」、つ

まり明石の岡のそれもあらわすと幽斎は考えていた。実際に彼の『源氏巻名和歌』には、

松風

独こし此山陰の心しれおもひをかべのやどの松かぜ

（細川幽斎『源氏巻名和歌』）

「ひとりうつり住んだ山陰の心細さを知ってほしい。岡辺の宿の「松かぜ」がしきりに思われることだ」という作品が残されている。尼君と明石の君、いずれの立場によるものかははっきりしないが、「捨てし家居も恋しう」という本文を踏まえ、光源氏との契りを強調するために「をかべのやど」をうたつたらしい。おそらく歌人は明石巻と松風巻をひとつらなりのものとして理解し、大堰の邸を岡辺の宿に重ねながら『源氏』を読んでいたのだろう。「聞きしに似たる」という措辞を、明石で過ごした日々への追憶、今はかえらぬ過去への慨嘆ととらえたのである。

とすれば、『衆妙集』の「昔覚ゆる松風ぞ吹く」もまた松風巻を意識する可能性が高い。幽斎は「尼君が京にあつて、かつて過ごした明石の岡の松籟をしのんだように、わたしも風の音にいにしえを思うのだ」と言いたかったのではないか。二つの和歌がともに「松風ぞ吹く」を結句とすることは、こうした推測の裏づけとなるに違いない。

幽齋は明石巻を本説とするだけでは満足せず、じつに手の込んだ方法で「昔の跡」を詠んだ。背景にはいったいどのような事情があったのか。

この歌は『玄旨様御歌』では

播州御陣の時、所々見物の次に明石の浦にて夜更る  
まで月をみて

あかし方かたぶく月もゆく舟もあかぬ詠にしまがくれつゝ

赤石の岡尋て見侍りしに、松の木だちふりたるをむ

かしのあとゝ里人のをしへ侍れば

夕日影あかしの岡のあととへば昔おぼゆる松風ぞ吹

と配列されており<sup>(五)</sup>、天正六年六月(二五七八年)、豊臣秀吉の毛利攻めにしたがつて「高砂(現兵庫県高砂市一带)に近い刀田寺に陣を取った」時期の作品と考えられている(加藤弓枝氏『コレクシヨン日本歌人選 細川幽齋』笠間書院、二〇一二年)。

本稿が特に注目したいのは「あかし方」の一首である(『衆妙集』三八四)。「明石瀉に傾く月も、漕ぎだしてゆく舟も、眺めているうちに島陰に隠れてしまう。いつまでも見飽きることはない景色だ」。加藤氏著は典故として、伝柿本人麻呂

ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れゆく舟をしぞ思ふ

(『古今集』羈旅・四〇九、よみ人しらず)

を挙げるが、幽齋の詠みぶりはあたかも本歌の視線をそのまま

なぞるかのようではないか。

「明石の浦」を訪ねた旅人は、ただ「夜更るまで月を」遠望するだけでは満足できなかった。人麻呂と同じように味わうのでなければ、明石の月影も意味はない。彼はそう考えたのである。たしかに「朝霧」のかかる直前、夜明けの風景をうたつたのは作者の創意であろう。しかし、この本質はむしろ『古今集』とひとつになって「あかぬ詠」を賞翫しようとする態度にあった。

同じことが「夕日影」の歌にも言える。「明石の岡」を前にして、心に湧きあがる懐旧の念を幽齋は古人と分かちあおうとした。みずからの感情を先蹤のうちに溶かしこみ、二重写しにして表現することを願った。けれども明石巻に岡辺の宿をなつかしむ言葉はない。明石の君や尼君が自分たちの住みどころをどうとらえているかすら、ほとんど記されないのだから。すなわちここに松風巻を本説とすべき理由が生じる。旅人の憧憬を『源氏物語』の作中人物に重ねるとすれば、大堰川のほとりで郷愁にかられる尼君こそうってつけの相手だった。

現代人の多くは「明石の岡」をただ岡として眺めるだろう。だが、十六世紀にとつての名所は決してそのようなものではない。風景は積みかさねられた物語や和歌の伝統を透かしながら享受される<sup>(六)</sup>。対象を裸眼でとらえるなどという無作法は心なき者のしわざであった。『衆妙集』の時代、人はなお文学的に見、文学的に書くことが可能だったのである<sup>(七)</sup>。

[注]

(一) なお、中世後期から近世初期の古注釈では、明石の君の住まい

を「岡辺のやど（家）」と呼ぶのが通例になっていた。「つくれるさま 岡辺のやどをいへり」「これは心ぼそく 岡辺のやど物あはれるさま也」「三条西実隆『細流抄』」、「かの岡辺の家も 明石上のすむかた也」（中院通勝『岷江入楚』。物語のなかにそのような字句があらわれるだけでなく、『源氏』を論じる際の用語として固定化し、ひろく共有されていたことは、幽齋の和歌を考えるうえで興味深い。

(二) 田村柳菴氏「建保三年内裏名所百首考——解説に代えて——」

『内裏名所百首』所収、古典文庫、一九八八年）は同百首歌について、歌歴の浅い詠進者が多いこと、名所歌であることなどから、同類に陥る可能性が高く、定家は「自作に対しても、他の作者と同じ本歌を取り用いないように神経を尖らせており、場合によっては、詠み替えすら行っていたようである」と指摘する。

(三) 正広歌のうち「真木の戸」は「月入れたる真木の戸口、けしきばかりおしあけたり」(『源氏物語』明石巻、「あたら夜」は「十三日の月のはなやかにさし出でたるに、ただ「あたら夜」と聞こえたり」(同前)に基づく。また、貞徳歌「水鶏に聞き添へて」は明石の入道が源氏の箏に聞かせる場面、浜の館が「ただそこはかとなう茂れる蔭どもなまめかしきに、水鶏のうちたたきたるは、「誰が門さして」と、あはれにおぼゆ」(同前)と描写されるのを踏まえており、結局「岡の松風」は琴の音の隠喩と思しい。

(四) 「さぞなあかしの岡の屋作／柿の本の人丸太をやはこぶらん」(『境

海草』七二九、阿知子顕成)、「ほんのりと色や明石の岡つつじ」(『続山井』二四四六、川辺友久)、「或時は琴を枕のおんつもり／明石の岡をくづす身代」(井原西鶴『俳諧大句数』第七・六九八)のような例がある。

(五) 『衆妙集』が部類別の編集であるのに対し、『玄旨様御歌』は「編年体によって編集した『幽齋家集』と考えられる」(土田将雄氏『細川幽齋の研究』笠間書院、一九七六年)。

(六) 大谷俊太氏は「幽齋の歌論——名所ならぬ所の和歌の詠み方——」において幽齋の名所観について次のように指摘している。「見た目以上に深くその景色を味わうには、その土地に蓄積された「歴史」が必要である。「歴史」のない景色に我々は感動できないのであるし、その感動を人に伝えるよすがにも乏しい。本意と実感は対立するものではなく、共存することによりいつそ人の心に深く沁み込むのである」(『細川幽齋——戦塵の中の学芸——』所収、笠間書院、二〇一〇年)。和歌の場合、「歴史」というよりも「文学的伝統」とするのが正確であるように思うが、本稿で取りあげた明石岡詠はまさしく本意と実感の共存を目指そうとした作品と評せよう。

(七) この研究はJPS科研費19K12491の助成による。

(なかむら たけし・神戸学院大学人文学部准教授)